本と地域の情報誌
県北 どらくろあ
第109号　2025年4月1日（毎月1日発行）

中国5県絶景の旅④

「山口県萩市・黄檗（おうばく）宗護国山東光寺
――団結力誇る石灯籠の軍団

長州山内氏の菩提寺である常関寺から2、3キロの場所に、高杉晋作の墓所である東行庵がある。幕末の長州藩の優柔不断さに抗議するように、晋作は10年のいとま乞いをして髷（まげ）を落とし、僧形になった。そのとき「西へ行く人をしたひて東行くわが心をば神やしるらむ」と詠み、東行（とうぎょう）と号した。「西に行く人」は晋作が敬愛する西行法師のこと。西は西方浄土を意味し、死に向かうという隠喩。その反対の東に行くと宣言したのは、江戸の幕府打倒を暗示しているようで、いかにも直情径行、破天荒な晋作らしい。

東行庵の駐車場に売店があり、「晋作餅」が名物。こし餡を包んだ焼き饅頭で、それを赤紫蘇でくるんだものと2種類ある。上品な甘さで、漬けた紫蘇葉の塩気もいい感じ。小腹が空いていたこともあり、その場で3個食べてしまった。

高杉家のルーツは、広島の安芸高田市吉田にある。司馬遼太郎の「街道をゆく―芸備の道」によると、安芸にいるときは武田姓。鎌倉時代に関東御家人たちが累次、西方の先進地帯に守護や地頭として送り込まれた。武田氏や毛利氏も然り。勢力争いで毛利氏の軍門にくだった安芸武田氏は、今の三次市の東南方にある高杉という村に家臣として移住、その地名を称した。

東行庵は下関市吉田町にある。晋作が創設した奇兵隊の本拠地があった場所で、遺言によって当地に埋葬された。高杉家の祖先である武田氏が安芸の吉田の領主だったという偶然が興味深い。下関の吉田の領主だった山内梅三郎（通恂、19代当主）が、奇兵隊の総督を務めている。奇兵隊が幕府軍と戦った時、長州山内氏の菩提寺である常関寺に野戦病院が置かれ、負傷兵が収容された。境内には、奇兵隊士6名の墓碑がある。

奇兵隊は、藩士以外の市民兵を募ったという点で画期的だった。正規の藩士の隊よりも強かった。防長の地への減封により農民になった毛利の家臣の多くが奇兵隊に参加、ただの烏合の集ではなかったのである。

高杉東行記念館の裏山（清水山）の公園に、晋作の墓所がある。正面の墓石にはただ「東行墓」とだけ刻んである。公園をさらに上ると、晋作の陶製の立像が高所から睥睨している。「動けば雷電の如く、発すれば風雨の如し」、晋作と共に戦った伊藤博文が晋作を評した言葉である。剣豪でもあった晋作像の剣は太く長い。結核を病んで27年と8ヵ月の生涯だった。

その日は下関で一泊、翌朝、萩を目指した。下関インターチェン

東光寺の「毛利氏廟所」。石灯籠が整然と並んでいる

東行庵の高杉晋作陶像。備前焼の伊勢崎陽山作

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会